

第357回
日本泌尿器科学会新潟地方会
《プログラム》

日時:平成23年3月12日(土) 午後3時00分
会場:イタリア軒 3階 『サンマルコ』
新潟市中央区西堀通7 025-224-5111

次回 第358回新潟地方会予告
期日:平成23年6月11日(土)
会場:山梨大学担当
演題申込期限:平成23年4月上旬

PC発表のみです。

口演時間は、1題6分。討論2分(時間厳守)

日本泌尿器科学会会員証を必ずご持参下さい。

951-8510 新潟市中央区旭町通1の757

新潟大学医学部泌尿器科学教室内

日本泌尿器科学会新潟地方会

会長 高橋 公太

TEL:025(227)2289/FAX:025(227)0784

15:00～15:56

座長 笠原 隆

1. 新潟大学医歯学総合病院泌尿器科における2010年の手術統計

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野

星井達彦、白野侑子、笠原 隆、新井 啓、谷川俊貴、西山勉、高橋公太

2010年の手術室での手術件数は350件、密封小線源療法(LDR)は17件、高線量率組織内照射療法(HDR)は35件、計402件であった。なお、LDRは前年と比べてほぼ横ばい(前年18例)であり、HDRは増加(前年19件)していた。2007年7月からLDR、2009年6月からHDRを開始し、2010年12月末の時点でそれぞれ計62件、計54件と順調に症例を重ねており、当科では限局性前立腺癌に対する治療法として定着しつつある。

2. 新潟県済生会三条病院泌尿器科における2010年度手術統計

済生会三条病院 金子公亮、渡辺竜助、郷 秀人

当院は2010年度に3人体制となり、年間手術件数は499件、体外衝撃波結石破砕術 181件(複数回を含め)、また前立腺針生検を167症例に施行した。その内訳を報告するとともに、当院泌尿器科の特色を、データを交えて紹介したい。

3. がんセンター新潟病院における2010年の手術統計

県立がんセンター新潟病院¹⁾、県立吉田病院²⁾、新潟南病院

小林和博、秋山さや香、北村康男、斎藤俊弘¹⁾、若月俊二²⁾、小松原秀一

2010年の手術件数は995件(938名)であった。腎癌(腎摘33、部切12)、前立腺癌(生検373、全摘22)、膀胱癌(膀胱全摘13)、精巣腫瘍(高位精巣摘出15)は例年とほぼ同等で、腎盂尿管癌(腎尿管全摘41)、膀胱癌(TURBT 294)などが増加していた。2009年から開始した前立腺癌に対する低線量率組織内照射は17件であった。近年と同様、癌の治療に特化した内容であった。

4. 新潟市民病院の平成21年、22年の手術統計

新潟市民病院 川上芳明、筒井寿基、今井智之

平成21年は、延べ610人に対して621件の手術(前立腺生検 179、TUR-Bt 115、ESWL 97、根治的腎摘除術 19、精巣固定術 17など)を行いました。

平成22年は、延べ577人に対して591件の手術(前立腺生検 131、TUR-Bt 119、ESWL 111、根治的腎摘除術 27、精巣固定術 14など)を行いました。

5. 当科での20年間の手術統計 最近の傾向について

刈羽郡総合病院 羽入修吾、池田正博

1991年常勤化から20年間の手術件数は延5,796件で、2006年に2人体制となってからは延2,225件であった。2005年以前は年平均238件、2006年以降は445件であった。2010年は528件で増加傾向は続いている。前立腺健診による針生検と根治的前立腺摘除術の増加、2004年のESWL開始、高齢化による悪性腫瘍の増加、肥満増加による結石の増加などが影響していると思われる。

2001年開始の鏡視下手術は24件、2006年以降のTUI-ESは33件、2010年開始のTOTは4件、TVMは1件であった。

6. BCG膀胱内注入療法後に萎縮膀胱を呈した2例

新潟県立十日町病院 泌尿器科 丸山 亮

BCG膀胱内注入療法後の副作用として、萎縮膀胱の頻度はそれほど高くはない。しかし一旦生じると、不可逆的であり保存的治療で改善せず、やむをえず膀胱全摘になるケースもある。今回、BCG膀胱内注入後に萎縮膀胱を生じた2症例を経験した。いずれにもステロイドパルス療法を施行したが、1例は軽快したものの、もう1例では改善しなかった。両者の効果の違いは、ステロイドパルス療法を行うまでの時間であり、素早い開始により効果が期待できると考えられた。

7. 心筋転移をきたした進行性腎細胞癌の1例

新潟県立中央病院泌尿器科 糸井俊之、水澤隆樹、片桐明善

症例は80歳男性。右腎癌 cT1bN0M0 の診断にて H20.1 月、根治的右腎摘出術施行。H21.6 月、肺転移出現しインターフェロン開始。H22.1 月、間質性肺炎となりインターフェロン中止。同年10月よりソラフェニブ開始したが day15 で労作時の息切れあり。胸部 CT で肺動脈血栓症、心筋転移と診断された。下大静脈腫瘍塞栓を伴わない心筋転移は非常にまれでありこれまで十数例の報告があるのみである。

15:56~16:52

座長 米山健志

8. 急性虫垂炎を疑われた小児シュウ酸カルシウム尿管結石の1例

新潟市民病院泌尿器科¹⁾、小児外科²⁾、小児科³⁾
筒井寿基、今井智之、川上芳明¹⁾、平山 裕、
橋詰直樹、飯沼泰史²⁾、渡辺 徹³⁾

急性虫垂炎手術を目的に当院小児外科に救急搬送された8歳の男児。術前CTにて、虫垂の腫脹は認めず、右回盲部付近に8×6mmの尿管結石と右水腎症を認めた。虫垂切除術を中止し、全身麻酔下に緊急ESWLを施行した。翌日には白色の排石を認めた。当初、シスチン結石を疑い、アミノ酸分析など行ったが異常なく、結石分析ではシュウ酸カルシウム98%以上との診断であった。全尿路結石患者における小児の割合は1%と稀である。

9. 局所浸潤、腹膜播種、腹壁浸潤を伴う右尿管腫瘍に対し、MFAP療法、ゲムシタピン・パクリタキセル併用療法、ゲムシタピン・ドキシフルリジン 維持療法を行い、50ヶ月の生存を得ている1例

会津クリニック¹⁾、竹田綜合病院²⁾
玉木 信¹⁾、新井 啓、糸井俊之、加藤義朋、細井隆之、松岡俊光²⁾

症例は41才女性。近医泌尿器科より右尿管癌にて紹介、同医での生検にてUC、Grade1。平成18年12月からMFAP療法を施行しSDであったが、その3ヶ月後に原発巣の増大のためセカンド

ライン化学療法としてゲムシタピン・パクリタキセル併用療法を施行されSDであった。その後維持療法としてゲムシタピンは同量のままの1100mg/m²をday 1,8,15,に点滴静注、ドキシフルリジン400mg/bodyを連日内服し28日を1コースとした。この間わずかな腫瘍径の増大はあり、また、尿管口からの腫瘍の突出に対し経尿道的切除を行ったが、維持療法の40ヶ月の期間中、新規転移の出現はなく通常の社会生活を送っている。

10. 当院3年間の前立腺密封小線源療法の経験

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野¹⁾ 放射線科²⁾
白野侑子、瀧澤逸大、笠原 隆、原 昇、新井 啓、
西山 勉、高橋公太¹⁾、川口 弦、青山英史²⁾

目的：当院で行った前立腺密封小線源療法について報告する。対象：2007年から2010年3月までの限局性前立腺癌患者51例(平均68歳)を対象とした。33例で前立腺縮小目的のアンドロゲン抑制療法が行われた。方法：ポストプランにおける、線量効果に関する各パラメーターを算出した。また、治療開始前、治療後3、6、12、18、24ヶ月までのQOL追跡調査(IPSS、EPIC)を行った。さらに、泌尿生殖器・消化管毒性をRTOG(Radiation Therapy Oncology Group)毒性基準に基づき検討した。

11. 前立腺癌に対する組織内照射後の血清PSA値の推移に関する検討

新潟大学医歯学総合病院 泌尿器科
秋山さや香、瀧澤逸大、笠原 隆、原 昇、
新井 啓、西山 勉、高橋公太

新潟大学病院で2007年7月から2010年3月までに低線量率組織内照射(LDR: low dose rate brachytherapy)を施行した51症例と高線量率組織内照射(HDR: high dose rate brachytherapy)を施行した27症例を対象とした。アンドロゲン抑制療法(ADT)を併用した症例はLDR群32例、HDR群16例であった。両者につき、放射線療法後のPSA値の推移を検討した。

12. 当院の前立腺全摘患者の成績

長岡赤十字病院 安楽 力、鈴木一也、米山健志、森下英夫

当院では平成15年から平成22年までの8年間で、191例の前立腺癌患者に対して前立腺全摘を施行してきた。そのうち、直後に内分泌療法を施行している4例を除いた187例についての短期成績について報告する。

13. 末梢組織におけるDHT合成にTestosteroneは必要か

新潟大学大学院分子腫瘍学分野¹⁾、Oncology, Molecular Endocrinology and Genomics Research Center, CHUL, Quebec, Canada²⁾
山名一寿¹⁾、Melanie Samson, Fernand Labrie, Van Luu-The²⁾

最も強いアンドロゲン作用を示すDihydrotestosterone (DHT)は、Testosterone(T)が5 α -reductaseによって還元されて合成されると考えられている。また、この2つの男性ホルモンDHTとTは、共に同一のアンドロゲン受容体(AR)を介してその作用を呈するとされている。で

は、一体なぜ同じ受容体を刺激するのに、TはDHTにあえて形を変える必要があるのだろうか。薬理&酵素学的アプローチでこの疑問について考察してみた。

14. 平成 21 年度新潟県前立腺がん検診

県全域と主要地域別の検診結果

新潟県前立腺がん検討委員会

小松原秀一、西山 勉、波田野彰彦、斉藤俊弘、森下英夫、
羽入修吾、片山靖士、片桐明善

平成 21 年度は検診対象者数 201,574、受診者数(率) 27,900(13.8%)、要精検者数(率) 2,274(8.2%)、精検受診者数(率) 1,568(69.0%)、がん数 154、発見率 552.0(人口 10 万対)、早期がん割合 71.4%であった。県内主要地域別の結果についても報告する。

16 : 52 ~ 17 : 20

【日本泌尿器科学会新潟地方会総会】

[休 憩 17 : 20 ~ 17 : 35]

サテライトセミナー

日時：平成23年3月12日(土)
17時35分～18時45分
会場：イタリア軒 3階『サンマルコ』

17時35分～17時45分
情報提供

「ユリーフの有用性について」

第一三共株式会社

17時45分～18時45分

司会 新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野
教授 高橋公太先生

「トランスレーショナルリサーチとしての前立腺癌遺伝子治療
-アカデミアとしての取り組み-」

講師 岡山大学病院 新医療研究開発センター
教授 那須保友先生

共催 日本泌尿器科学会新潟地方会
第一三共株式会社

サテライトセミナー終了後、懇親会を行います。